

日時: 2026年2月26日(木) 10:00~12:10

場所: 東京電力ホールディングス 本社 本館3階 3C 会議室

出席者:

浅間特任教授(東大)、岡本教授(東大)、小山シニアエキスパート(電中研)、
宮崎審議官、八木特別対策監、加賀室長、須賀参事官、駒田企画官
内閣府、文科省、厚労省、復興庁、NDF、東芝、日立、三菱重工、MRI、MRA、IRID、JAEA、
電中研、東電 他

1. 前回議事概要確認

- ・ 東京電力より、前回議事概要について説明があった。

Q. 現場でどういったことが起こっているのか一般の人にはわからないので、広報活動を通じ、自分のことのように感じていただくことが重要と思う。具体的には2社になるが、3.11 に向けて大々的な新聞記事を書けると聞いている。(浅間特任教授)

A. 現地の映像を見ていただくことで一般の方に状況を把握していただけたと思う。(東電)

A. 政府としてもしっかり広報対応を行う。(資工庁 加賀)

2. プラントの状況

- ・ 東京電力より、プラント関連パラメータについて説明があった。

Q. 1号機のD/Wの雰囲気温度だが、2月10日くらいから赤のグラフが上がり、紫のグラフが下がっている。10月15日くらいにも同じようなことが起きているようだが、給水系の切り替え等の関係があるのか。(岡本教授)

A. 赤いグラフはHVHの戻り12Dの温度である。グラフ中の※1に記載しているが、大気圧の変化で温度が変化する。(東電)

Q. 1週間くらいの長期のサイクルで上がったり下がったりしている。給水ライン切り替えのトリガーではなく、理由はわからないが、半年に1回くらい上がったり下がったりするのか。(岡本教授)

A. 排気ファンの定例の切り替えをしていた。前回実施計画対象から除外した変動が大きい温度計も上がっており、再度切替等を行い、内部の圧力変動を与える対応を行っていた。要監視中ということで監視している。(東電)

Q. 1号機は過去にもこういった現象があり、気持ち悪い。半年前にも同じような作業を行ったからと思った。大きなリスクにはならないと思うが、温度変化をウォッチしてほしい。(岡本教授)

A. 拝承。(東電)

3. 個別分野毎の検討・実施状況

- ・ 東京電力より、これまでの一ヶ月の動きと今後一ヶ月の予定について、「中長期ロードマップ進捗状況(概要版)」並びに以下の資料に基づき説明があった。

① ゼオライト土嚢等処理の進捗状況について

- ② 2号機 PCV 内部調査・試験的取り出し作業の状況
- ③ 3号機 PCV 内部気中部調査（マイクロドローン調査）について
- ④ 3号機 S/C 内滞留ガスの水素濃度低減について
- ⑤ 固体廃棄物の保管管理計画の改訂(2025 年度版)
- ⑥ 1号機 S/C 水位の低下の状況について
- ⑦ 2026 年度廃炉研究開発計画について

・ 質疑応答における主なやりとりは以下の通り。

<ゼオライト土嚢等処理の進捗状況について>

- Q. ロボットのカメラ映像が見にくいとあったが、先日のカメラの異常があったので、カメラの被ばくによる不具合が生じないか気になる。ゼオライト土嚢を除去しているロボットに付けているカメラが、作業箇所の線量がどれくらいで、どれくらい被ばくしたのかを管理したり、推定して使うことが重要と感じた。情報があれば教えてほしい。(浅間特任教授)
- A. 画像が見にくいという点についてだが、カメラの照射試験を行っており、カメラの被ばくは1,000Gy まで大丈夫である。現場の線量はわからないが、この上限には達していないことを確認している。画像自体も、ノイズがしっかり出ていることもあるので、カメラ自体は大丈夫と思う。(東電)
- Q. 1,000 グレイという値を信じてはいけないということを言いたかった。テレスコ式装置のカメラのように仕様上は壊れないものが壊れたので、1,000 グレイ以下でもカメラが壊れるということも考え管理してほしい。ノイズが出て乱れるということは、どれくらい被ばくしたかを推定できる情報になるので、それをもとに管理するといい。(浅間特任教授)
- A. テレスコ式の件もあったので、ガンマ線の線量は一桁下がるオーダーではあるが、今後はしっかり確認したい。(東電)
- Q. カメラが悪いというより、濁って見えないことと感じた。ソナーの絵だけでもいいので、そういう動画があるといい。なお、70%移設ができたということだが、前回トライアルを行った際は、隅っこに大部分が残っているということだったが、今回はどれくらい回収できたのか。今後評価すると思うが、どの程度まで回収される予定なのか、掃除機で吸うだけでなくジェットを噴出し巻き上げ可能な限り回収するのかということも含めて教えてほしい。(岡本教授)
- A. 隅っこの部分については、できていない 30%が隅っこのところである。これから行う計画である。ジェットを吹きかける予定で、ジェットを吹きかけ壁に反射させ廊下の真ん中にくるようにする。モックアップも行っている。一粒たりとも残さず回収は難しいが、それを目指してやっていきたい。(東電)
- Q. 今回、カメラが見えづらくなったということだった。大部分の移動が終わったということであったが、それをカメラで見るのか、それともソナーやガンマ線で確認するのか。(小山シニアエキスパート)
- A. 終わったあとの確認は、カメラとソナーの併用を考えている。近距離であればカメラで確認できるが、局所的な確認になる。ソナーでは凹凸を判別できるので、カメラで確認できない場所を起点に全体をソナーで確認する。カメラについては、ROV の交換を行うので、交換後のカメラは新品になりそれで確認する。また他の手段でカメラを使い確認することも考えている。(東電)

<2号機 PCV 内部調査・試験的取り出し作業の状況>

- Q. 動画がメディア公開されるので、後で見たい。目的は何か、実施項目が何か、タイムラインを含め公開されるということで良いと思う。一般の方はテレスコ式を入れたことは知っていて、なぜアームを入れるのか、テレスコ式とのミッションの差異は何かという説明が重要。アクセスルート構築、3次元情報の獲得、線量測定等、テレスコ式ではできなかったことを行うことを説明すると良い。燃料デブリ取り出しの全体との兼ね合いがどうなっているか言えると良いと思った。工法がまだ確定していないので、どこまで具体的にかけるかわからないが、本格的な取り出しを行う前の工程はある程度書けると思うので、一目両全で分かる表があると良いと感じた。一般の方には、ロボットアームと双腕マニピレータというワードが2つあるのでわかりにくいと思う。双腕マニピレータでロボットをメンテナンスするというのが図でわかると良い。(浅間特任教授)
- A. テレスコ式との差異、ロボットアームと双腕マニピレータの役割、本格的取り出しに向けた全体の流れについては、今後もメディアにも聞かれるので、わかりやすく説明できるように工夫したい。(東電)
- Q. 今回はフルリモートで、それが売りだと思う。その点をしっかり PR してほしい。大型機器を設置するのでかなり被ばくと思う。計画線量を出してもらったこともあるが、テレスコ式より小さくなると思うが、今後作業を行う上で、計画と実績の記録を紹介してほしい。あまり話がなかったが、最初に、アクセスルート構築でAWJを使い削るが、1号機のようにダスト濃度が上昇して1週間のところを1年かかり遅れたこともあった。ダスト濃度の上昇についての対策はどうなっているのか。可能であればダストサンプラーでモニターし、どれくらい周辺のダウト濃度が高くなるかの検討について教えてほしい。(岡本教授)
- A. フルリモートが一番の売りという点もしっかり PR したい。被ばくについても、計画と実績を記録するので改めて紹介する。ダスト濃度上昇については、X-6 ペネの堆積物除去作業でも AWJ を使い作業を行っているが、試射という形で短い時間噴射し、PCV 内のダスト濃度の上昇傾向を監視し、問題の有無を確認した後、実際の長時間の作業を行う。監視という観点では、PCV ガス管理設備のフィルタの手前に仮設でダストモニタを設置し、ダスト濃度の上昇をモニターしながら作業を行う。(東電)
- Q. ダスト濃度上昇は、1号機の例があるように、工程遅れにつながる。3号機でダスト上昇してはならないのか。1号機のときに保安規定を変えた方がいいと言ったが変えていないと思う。今後、3号機では様々な作業があるので、ダストが少しでも上がると作業ができなくなるのは本末転倒と思うので、保安規定の変更を含め、その場対策を行っている時は過ぎるので、リスクの議論を規制庁とも話してほしい。今回、フィルタ手前にダストモニタを置くということだが、30分～1時間くらいの時間遅れがあると思う。少し切った後、少し待ち、また切るという感じになる。今回はX-6ペネの外になり、切断線も長くなるので、ダスト濃度上昇という本質ではないことで遅れるリスクが気になるので検討してほしい。(岡本教授)
- A. フィルタ手前で PCV 内でのダスト濃度上昇を監視すると言ったが、PCV の中でダスト濃度が上昇することについては否定するものではない。一方で、フィルタの後の原子炉建屋中で上昇することは問題視している。フィルタの後はダスト濃度が上昇しないことは確認しており、同様に今回の作業でも監視していく。監視等の運用をしっかり確認し作業を行いたい。(東電)
- Q. PCV 内であれば、ダスト濃度は無限に上がっても保安規定違反にならないという理解でよい。(岡本教授)
- A. その通り。(東電)

- Q. 1号機で1年かかったのは、フィルタの後のダスト濃度が上がったからということか。(岡本教授)
- A. フィルタの下流側ではダスト濃度は上昇していなかったが、事前に予測していたダスト濃度よりも上がってしまったので、なぜなのか、今後の予測はどうかと一旦立ち止まったことで時間がかかった。現場で問題が生じたものではない。(東電)
- Q. 基本的には、PCV内のダスト濃度が無限大になっても作業を継続できるという理解でよいか。(岡本教授)
- A. 無限大というのは言い過ぎかもしれないが、ガス管理設備の下流側に影響がない範囲であれば許容できる。(東電)
- Q. フィルタが詰まると圧力損失上がる。フィルタの後ろで保安規定以下であれば切っても構わないと理解したが、ダスト濃度が上昇しても切り続けられるということで良いか。(岡本教授)
- A. ダスト濃度が上昇して、仮にガス管理設備のフィルタの詰まりが発生しても、フィルタ交換ができるように手配を行い、作業を行う。(東電)
- Q. マスコミにも出したということで、3Dで分かりやすい。非常にメカニカルでレベルの高いものを作り、大規模取り出しへのステップが良くわかると感じた。結局、これでデブリをどれだけ取るのか、何回くらい取るのかの記載がないのが気になる。前は2回であったが、見通しは何かあるのか。2号機はデブリの落ち方が違うので、全体を見て選んで取れるということは凄いことなので、どういったものを取るということも強調してほしい。(小山シニアエキスパート)
- A. 今回テレスコ式で2回行ったが、P3に一連の流れを示している。デブリを採取する量は、テレスコ式と同様に3g未満のものを取る。今回のロボットアームでの一連の作業で、まずは1回燃料デブリの取り出しを行う。その点はしっかり工夫して説明したい。(東電)
- Q. ロボットアームについては、デブリ採取だけが目的でなく、他の情報も大事だということも強調して説明してほしい。(小山シニアエキスパート)
- A. 拝承。(東電)

<3号機 PCV 内部気中部調査(マイクロドローン調査)について>

- Q. 芯ずれのメカニズムを解析でき良かった。クローラで能動的に推進する機構なので、基本的なことだが、重力の抗力に比例してトラクションが発生するので、重力が床に対してかかっていないとトラクションを発生できない。つかえている車輪が、何らかの影響を及ぼしクローラ部分の地面に対する抗力が減ることが良くない状況になる。この解析を定量的に検討すると良いと思う。押し棒があるなら、クローラはいらないと感じたが、クローラがあるので、押し棒で押しにくくなるということもあり得るので、押す際は、クローラがフリーになると良い。段差があるところで動く車輪で一番有効なものはロッカーボギーである。車輪のところにパッシブなリンク機構を加えたものである。月面装甲車で使われている機構である。ロッカーボギーの車輪だと段差等をスムーズに進めるので良かったと思う。(浅間特任教授)
- A. 今回、原因が接続管とX-53ペネの芯ずれとわかった。配管内を貫通させる調査装置を使用する作業では、事前に、配管の中の状況をよく確認し、その結果を基に装置設計していくことの大切さを痛感した。押し棒については、3号機のR/Bは高線量なので、なるべく作業員が現場に入る時間を低減するというでクローラの装置設計を考えていた。押し棒についてもモックアップ等を行い、押せるということを確認しており、万が一の時はこういった体制で臨みたい。(東電)
- Q. 期待している。今回の改良は、どこかのロボコンのような印象があり良かったと思う。行き

は良いが、帰りに引っかからないか。帰ってくるときの段差を経験していないと思うので、帰ってくることは確認しているのか。そういう意味では、押し棒だけでなく、引っ張り棒も必要ではないか。被ばく低減の話もあったが、ドローンのリプレイスは人が近づき作業するが、今後につながると思うため、計画と実績線量の比較を紹介してほしい。(岡本教授)

A. 対策品については、P4 に示したように中央のタイヤをアーチ状にする対策を行ったが、対策品を用いて、実際に3号機のインストール配管でも有効性を確認した。前進後進とも問題なく走行できることを確認している。被ばく線量についてもとりまとめ報告したい。(東電)

Q. 万が一の時は棒を引っ掛け引っ張れるということでもいいか。(岡本教授)

A. 押し棒については、クローラに引っ掛ける機構はないが、押し棒でクローラの状態を変えられることをモックアップで確認している。5連の車輪対策は戻りの時も有効であり、段差でも大きな力がかからず円滑に帰ってくると設計しており、帰ってくることを現地で確認している。またケーブルを巻き取る力も強く、クローラで押すよりも戻ってくる方の力が強い。(東電)

<3号機 S/C 内滞留ガスの水素濃度低減について>

Q. パージをするところの配管の突き出ているところが悪さをして水素を抜けないと思った。今後、水素濃度が上がるということが考えられるのであれば、水素濃度が下がった時に、この部分を切断すること等を考えても良いと思ったが、考えはあるか。(浅間特任教授)

A. S/C 上部に突起があるので、水素が溜まってしまうことは指摘のとおり。水素が無い方が管理上は望ましい。一方で、アクセスルートについては P2 にあるように、S/C は地下にあり、1階面にある AC 系配管からアクセスする必要がある。S/C 内部を除去する場合は、AC 系配管から何らかのロボットを挿入し、屈曲した配管を通った上で、S/C 内部で切断するというかなりハードな技術開発を伴うと思う。一方で、水素溜まりは S/C 水位を下げることで PCV と連通するので、PCV 全体のガス管理として窒素を封入し水素濃度を下げる動的な管理が可能となる。(東電)

C. 除去するときは、心臓の手術をするときに使うカテーテルのようなもので、様々なものを焼くという技術を用いると良いということだった。(浅間特任教授)

Q. 水素濃度が将来上がる可能性があるという話したが、G 値がだいたいわかっているのに、水の量が多いが、 90Nm^3 で 1%上がるので、 1m^3 の水素が出るのは時間がかかる。明日にも 1m^3 の水素が出るような印象であるが、線量がわかっているのに、G 値を使い、40 年後に 1m^3 出る等、定量的に示してほしい。(岡本教授)

A. 資料に定量的に示せていなかったが、保守的に概算で計算したところ、年間で水素発生量は 6.6m^3 発生する評価である。残っている空間が 800Nm^3 とすると、4%となるのは約 3 年後になる見込み。(東電)

Q. 6.6m^3 というのは 10 倍大きいとすると 30 年もつ。モニタリングを行い修正していくと思うが適切に対応してほしい。(岡本教授)

A. 拝承。(東電)

<固体廃棄物の保管管理計画の改訂(2025 年度版)>

Q. 非常にわかりやすかった。優先度を定める際に、色分けされており、リスクをある程度定量的にとらえることは難しいが、定性的に段階的に評価していることは重要と感じた。ここで提案されているものは、コントロール度が入っているものと感じた。屋外だとそれが若干低くなるものと思う。例えば 5 段階のうち、コントロール度が低いもの、重要度の高いものをできるだけ優先してやってくるものと感じた。管理度のようなものを提案して、管理度の低いものをやっていくとさらに整理ができると思う。管理度を上げていくことがリスク低減につながる

感じた。(浅間特任教授)

- A. より定量的な評価は好ましいが、現状は P4 の区分になっている。現在の屋外一時保管に際しての廃棄物の受け入れでこうなっている。NDF の戦略プランにある SED 手法のようなもので中のインベントリと管理状況を定量化し評価する手法もある。全体に比べれば、デブリよりもリスクが低くなる評価にはなるが、そういった示し方も可能である。(東電)
- Q. 適切な処理を提示していただいていると思う。減容について、現在、可燃物は焼却するので体積が小さくなる。不燃物の減容は 50%と設定しているが、ドラム缶を潰すことで、あるいは、移設することで空隙率を下げるのか。平均すると 50%になるが、そういう推定に基づいた定量化か。10 年後の発生量について、P15 で 1 年の差で書かれているが、減容対象外が、22.2 万 m³ から 23 万 m³ で 0.8 万 m³ 増えていることになるが、年間 0.8 万 m³ になり、10 年経つと 8 万 m³ になる。減容対象外が増えていくと保管庫に入れるしかないと思う。第 12 棟を設置すればよいと書いてあるが、このあたりの考え方がわからないので減容について教えてほしい。(岡本教授)
- A. P15 のグラフで説明する。不燃物の減容率だが、屋外で集積されていないコンテナに入っていないものは減容施設で切断やコンクリートは破碎を行うが、かさ密度が倍くらいに増すのでそれを見込んで減容率にしている。古いコンテナに入っている廃棄物は、充填率が良くないので、コンテナに移し替えることでかさ密度が大きくなるので倍以上の減容を見込んでいる。廃棄物の量についてだが、P15 では、2024 年度版のところは 2036 年 3 月時点としており、2025 年度版のところは 2037 年 3 月時点と記載している。昨年は 2036 年 3 月までの予測であったが、今回は 2037 年 3 月までの発生予測であるので 1 年分増えている。現状としては、全体量として、減容前で年間 2 万 m³ 発生していく想定なので、減容後でいうと 7~8 千 m³ 増えることになる。10 年経つと 7~8 万 m³ となるので、ここをさらに減らすことが廃棄物対策として重要であり、持ち込み抑制、減容、再利用の拡大等の取り組みを行っていききたい。(東電)
- Q. 8,000m³/年で増えていくということで、今後 10 年、20 年経つと 16 万トンになる。デブリ取り出しや Rw/B の解体が始まると尋常ではないオーダで増えていく可能性があるのもこのあたり含め適切な管理をしてほしい。(岡本教授)
- A. 拝承(東電)
- Q. P15 で確認だが、2つポツがあるが、1 ポツ目についてだが、細かいことを言うと数字が 0.4 万 m³ 足りない。この記述が概要版にも同じ記述があるので、保守的に見積もっており、実際は幅がある等エクスキューズがあると良い。(小山シニアエキスパート)
- A. P15 の文章のつながが悪い。2036 年度末だと 28.6 万 m³ で超過する。2035 年度までは大丈夫だが、2036 年度末までには第 12 棟を作ることによって間に合うという意図である。(東電)
- Q. 概要版は目立つので、記載について工夫してほしい。(小山シニアエキスパート)
- A. 資料に言葉を追加したい。(東電)

<1 号機 S/C 水位の低下の状況について>

- Q. 事故が起こった直後くらいから、ロボットで外から水位が見えるか、漏えい箇所はどこか探したが上手くいかなかった。漏えい箇所も北東部の三角コーナではないかと推定でき、以前よりわかってきたと思う。S/C の水位は下げた方がいいということだが、下げ過ぎると良くないこともあるので、これくらいの水位にすると良いといった目標値があるといいと思った。本来は、S/C 水位が低過ぎたりするとどういうリスクがあり、高過ぎるとどういうリスクがあるかを示し、どの水位にコントロールしておきたいという話があり、その上で、自然に任せるといふよりも、その水位の制御をどう考えるかをしっかり言うべきと感じた。(浅間特任教授)

- A. S/C を含めた PCV の長期的な維持、管理のあり方については別途検討しているので、あまり申し上げられないが、S/C については、冷却のために水位を維持する必要はない。水位を下げることで安全上の問題はないが、あるとすれば、S/C 底部の開口部が気中に出てくるので、PCV の気密管理が弱くなる。しかし、1 号機は開口部があり、気密を維持できていないので、S/C 水位を0にしても気密性の問題が出てくることはないと思う。そのため、現時点では水位を下げていくが、長期的な観点で見ていく。(東電)
- Q. 北東三角コーナあたりにあるものは、ここにかかっている CS/CCS ポンプ以外は S/C に繋がっている配管はなく、また他の配管がこの部屋に繋がっておらず漏えいはこの配管以外想定できないという理解で良いか。逆止弁から水位計を入れているということだが、逆止弁の線量率がわからないが、今後、半年後には水位が下がり、バウンダリを閉じることになりここは使えなくなると思う。今のうちに、光ファイバー等を入れ、S/C の中の様子を見なくても良いのか。空中になり、X-6 ペネと同じような場所になる。将来のために何か調査をしなくても良いのか。せつかく今なら調査できるのにバウンダリになってしまうが、ここは仕方ないという話なのか。将来のどうなるかを考えると、水が抜けた後、注水量は 1.5t/h になるが、三角コーナから吸い上げトラス室に入れトラス室の底から吸い上げている。注水量 1.5t/h がここに全部入ってくるのかわからないので、ポンプで吸い上げられない場合の検討をしているのか。1.5t/h を増やすという手もあるが本末転倒と思う。今後、監視しなくてはいけないバウンダリが増えるということについて、今のうちから考えておいた方が良い。(岡本教授)
- A. 北東三角コーナには、CS/CCS 系統以外の系統はない。逆止弁に水位計を入れているが、他に何か調査できないかという点については、ご指摘のとおり。この弁から物理的にもものを入れることはできるが、雰囲気線量が 7~8mSv/h と高いので、被ばく線量の観点からできることがあるかは改めて考えたい。右下 P4 で、1 号機の D/W に注入した水は、フラスコの底部から S/C には行かず、D/W 底部にあるサンドクッションドレンラインから原子炉建屋の地下に直接流れる。D/W とジェットデフの取り合い部は D/W の床面から数十 cm 高さがあり、そこまで水位が上がると S/C に水が流れていくが、現状では S/C に水が流れていない状態。長期的にこのままで良いかの課題は今後検討する。(東電)

<2026 年度廃炉研究開発計画について>

- Q. 支援を進めてほしいが、フィジカル AI が気になった。研究段階ではいいが、実際の作業で使えるかはまだわからない。まだ現場で使える技術レベルではないと思っているので、見極めて進めてほしい。(浅間特任教授)
- A. 中長期的な取り組みになると思う。現場の適用では、被ばく線量低減で必要になる技術になると思うので、東電、NDF とともに連携して進めていきたい。(資工庁 駒田)
- Q. フィジカル AI を使ったロボットを公募して作らせてもできない。ドローンを使う際に、人が入り作業を行っていたり、2 号機の作業では人が入っているが、難しい作業なので人が入らないとできない。例えば、無線中継器を持ち運び設置して戻ってくるといった具体的なロボットを 3 年間で、耐放射線、ガレキが散乱していることを考慮して開発すると良い。一人の作業員がかなり被ばくをしているので、単純作業を AI ロボットに置き換えられればメリットが大きい。そうすることで、場合によっては、建屋内 24 時間ドローンを飛ばせるようなことにもなる。具体的なタスク、環境条件を明記して公募してほしい。ニーズをはっきりさせることで、様々な方が参加してくれる。(岡本教授)
- A. 具体的なタスクということでコメントをもらったので、高難度のタスクというところではなく、実現可能なタスクで、一步一步進めていき、公募していきたい。(資工庁 駒田)

- C. 今日の話しであったように、雰囲気線量 7mSv/h の逆止弁から光ファイバーを投入できるロボットであれば実用性がある。このロボットの開発は時間的には間に合わないと思うが、この計画をぜひ進めてほしい。(岡本教授)
- Q. デブリ取り出しは 10 年、20 年と続く。毎日ルーチンでデブリ取り出しを行うので、人がいちいち行っている姿は考えにくい。日々ロボットが行うというのが将来的な廃炉作業とを感じる。それに向かって、戦略的なところから、今のうちに足掛かりを進めると良いと感じた。(小山シニアエキスパート)
- A. フィジカル AI の至近の現場適用ということで、中長期的な観点の取り組みとして始めたい。従前の国プロということで必要性は変わってないが、将来的にデブリ取り出し等で、無人のロボットをとということを見据え、取り掛かりとしてはじめて行きたい。中長期的な観点で進めていきたい。(資工庁 駒田)
- Q. フィジカル AI について講演を頼まれる。フィジカル AI は外国ではエンボディド AI と呼ばれる。ヒューマノイドに今の AI を搭載するということではない。現場で役に立つ作業をしてくれるロボットを開発することが重要であるが、勘違いされるケースがある。廃炉で行ってきたようなロボットが本来のフィジカル AI であると思う。(浅間特任教授)
- A. よく勉強したい。(資工庁 駒田)

次回の廃炉・汚染水・処理水対策チーム会合事務局会議は 3 月 26 日に実施予定。

以上